

LONDON

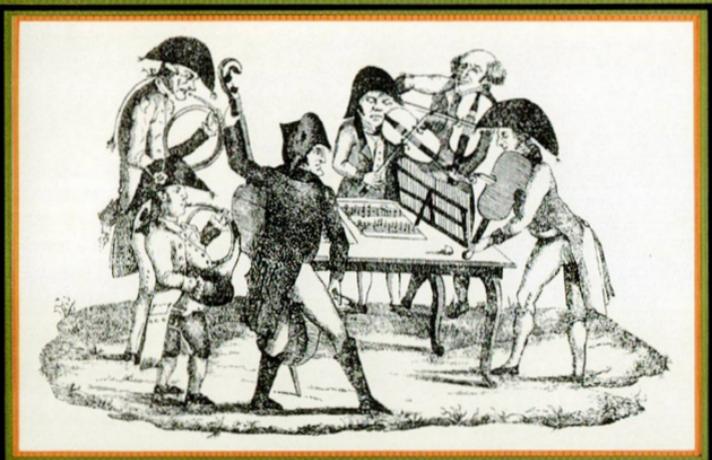
MOZART

*DIVERTIMENTO K.205 MARCH K.290
CASSATION K. 99*



Members of the VIENNA OCTET

DECCA



W.A. MOZART
DIVERTIMENTO in B flat major K.287

M. HAYDN
DIVERTIMENTO in G major

Members of the VIENNA OCTET



DECCA

WOLFG. AMAD. MOZART

Divertimento

Nr. 17 D-dur · KV 334

Divertimento

D-dur · KV 136

Mitglieder
des Wiener Oktetts

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

CD 1

ディヴェルティメント 第17番 ニ長調 K.334 (320b)
Divertimento No.17 in D major, K.334 (320b)

- | | |
|--------------------------------------|--------|
| ① 第1楽章: Allegro | [7:02] |
| ② 第2楽章: Tema con variazioni. Andante | [8:41] |
| ③ 第3楽章: Menuetto | [4:31] |
| ④ 第4楽章: Adagio | [6:02] |
| ⑤ 第5楽章: Menuetto | [7:00] |
| ⑥ 第6楽章: Rondo. Allegro | [8:34] |

ディヴェルティメント《ザルツブルク・シンフォニー》第1番 ニ長調 K.136
Divertimento No.1 in D major, K.136

- | | |
|-----------------|--------|
| ⑦ 第1楽章: Allegro | [3:57] |
| ⑧ 第2楽章: Andante | [3:59] |
| ⑨ 第3楽章: Presto | [2:34] |

ピアノと管楽のための五重奏曲 変ホ長調 K.452
Quintet for Piano and Wind Instruments in E flat major, K.452

- | | |
|----------------------------------|---------|
| ⑩ 第1楽章: Largo - Allegro moderato | [10:46] |
| ⑪ 第2楽章: Larghetto | [6:52] |
| ⑫ 第3楽章: Rondo. Allegretto | [5:52] |

CD 2

ディヴェルティメント 第15番 変ロ長調 K.287

Divertimento No.15 in B flat major, K.287

- | | |
|---|--------|
| ① 第1楽章: Allegro | [6:30] |
| ② 第2楽章: Tema con variazioni. Andante grazioso | [7:59] |
| ③ 第3楽章: Menuetto | [3:35] |
| ④ 第4楽章: Adagio | [7:06] |
| ⑤ 第5楽章: Menuetto | [4:02] |
| ⑥ 第6楽章: Andante - Allegro molto | [7:16] |

ミヒャエル・ハイドン
Michael Haydn (1737-1806)

ディヴェルティメント ト長調

Divertimento in G major

- | | |
|------------------|--------|
| ⑦ 第1楽章: Allegro | [2:55] |
| ⑧ 第2楽章: Andante | [3:48] |
| ⑨ 第3楽章: Menuetto | [3:00] |
| ⑩ 第4楽章: Finale | [2:20] |

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart

ディヴェルティメント 第1番 変ホ長調 K.113

Divertimento No.1 in E flat major, K.113

- | | |
|-------------------------|--------|
| ⑪ 第1楽章: Allegro | [4:03] |
| ⑫ 第2楽章: Andante | [3:39] |
| ⑬ 第3楽章: Menuetto - Trio | [2:01] |
| ⑭ 第4楽章: Allegro | [2:58] |

※日本初CD化

CD 3

ディヴェルティメント 第10番 ヘ長調 K.247

Divertimento No.10 in F major, K.247

- | | |
|---------------------------------|--------|
| ① 第1楽章: Allegro | [8:06] |
| ② 第2楽章: Andante grazioso | [3:04] |
| ③ 第3楽章: Menuetto | [4:03] |
| ④ 第4楽章: Adagio | [5:30] |
| ⑤ 第5楽章: Menuetto | [3:23] |
| ⑥ 第6楽章: Andante - Allegro assai | [6:02] |

クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581

Clarinet Quintet in A major, K.581

- | | |
|-------------------------------------|--------|
| ⑦ 第1楽章: Allegro | [6:21] |
| ⑧ 第2楽章: Larghetto | [6:26] |
| ⑨ 第3楽章: Menuetto - Trio I - Trio II | [6:00] |
| ⑩ 第4楽章: Allegretto con variazioni | [9:20] |

クラリネット三重奏曲 変ホ長調 K.498 《ケーゲルシュタット・トリオ》

Clarinet Trio in E flat major, K.498 "Kegelstatt-Trio"

- | | |
|-----------------------------|--------|
| ⑪ 第1楽章: Andante | [5:42] |
| ⑫ 第2楽章: Menuetto | [5:38] |
| ⑬ 第3楽章: Rondeau. Allegretto | [8:37] |

CD 4

- 行進曲 ニ長調 K.290/167AB(前奏) [2:20]
March in D major, K.290/167AB

ディヴェルティメント 第7番 ニ長調 K.205(167A)
Divertimento No.7 in D major, K.205 (167A)

- ② 第1楽章: Largo - Allegro [6:40]
③ 第2楽章: Menuetto [2:42]
④ 第3楽章: Adagio [5:14]
⑤ 第4楽章: Menuetto [2:49]
⑥ 第5楽章: Finale. Presto [3:39]

- 行進曲 ニ長調 K.290/167AB(後奏) [2:20]
March in D major, K.290/167AB

カッサシオン 変ロ長調 K.99/63A
Cassation in B flat major, K.99/63A

- ⑧ 第1楽章: Marcia [2:56]
⑨ 第2楽章: Allegro molto [3:28]
⑩ 第3楽章: Andante [4:40]
⑪ 第4楽章: Menuetto [2:33]
⑫ 第5楽章: Andante [5:03]
⑬ 第6楽章: Menuetto [2:17]
⑭ 第7楽章: Allegro - Andante [5:25]
⑮ 第8楽章: Marcia [1:31]

ウィーン八重奏団員

Members of the Vienna Octet

- アントン・フィーツ(ヴァイオリン)(CD 1: □-⑨, CD 2: □-⑩, CD 3: □-⑩, CD 4)
Anton Fietz, violins
フィリップ・マタイス(ヴァイオリン)(CD 1: □-⑨, CD 2, CD 3: □-⑩, CD 4: ⑧-⑬)
Philipp Matheis, violins
ヴィリー・ボスコフスキー(ヴァイオリン)(CD 2: ⑩-⑭)
Willi Boskovsky, violin
ギュンター・ブライテンバッハ(ヴィオラ)(CD 1: □-⑨, CD 2, CD 3: □-⑩, CD 4)
Günther Breitenbach, viola
ヴィリー・ボスコフスキー(ヴィオラ)(CD 3: ⑩-⑬)
Willi Boskovsky, viola
ニコラウス・ヒューブナー(チェロ)(CD 1: □-⑨, CD 2, CD 3: □-⑩, CD 4)
Nikolaus Hübner, cello
ヨハン・クルンプ(コントラバス)(CD 1: □-⑨, CD 2, CD 3: □-⑩, CD 4)
Johann Krump, contrabass
マンフレート・カウツキー(オーボエ)(CD 1: ⑩-⑫)
Manfred Kautzky, oboe
カール・マイヤー・ホーファー(オーボエ)(CD 4: ⑧-⑬)
Karl Mayrhofer, oboe
ギュンター・ロレンツ(オーボエ)(CD 4: ⑧-⑬)
Günther Lorenz, oboe
アルフレート・ボスコフスキー(クラリネット)(CD 1: ⑩-⑫, CD 2: ⑩-⑬, CD 3: ⑦-⑬)
Alfred Boskovsky, clarinet
クリスティアン・クバッシュ(クラリネット)(CD 2: ⑩-⑬)
Christian Cubasch, clarinet
エルンスト・パンペール (ファゴット)(CD 1: ⑩-⑫)
Ernst Pamperl, bassoon
ヨーゼフ・フェレバ(ホルン)(CD 1: □-⑥, ⑩-⑫, CD 2, CD 3: □-⑥, CD 4)
Josef Veleba, horn
オットー・ニツシュ(ホルン)(CD 1: □-⑥, CD 2: ⑩-⑬)
Otto Nitsch, horn
ヴォルフガング・トムベック(ホルン)(CD 2: □-⑩, CD 3: □-⑥, CD 4)
Wolfgang Tomböck, horn
ヴァルター・パンホーファー(ピアノ)(CD 1: ⑩-⑫, CD 3: ⑩-⑬)
Walter Panhoffer, piano

録音: 1956年10月(CD 1: ⑩-⑫, CD 3: ⑩-⑬)、1957年10月(CD 2: ⑩-⑬)、1961年4月6-7日(CD 1: □-⑨)、
1962年9月(CD 2: □-⑩)、1963年10月15-17日(CD 3: □-⑩)、1964年10月12, 17-18日(CD 4)
ウィーン、ゾフィエンザール

ウィーン八重奏団はヴァイオリンとクラリネットのボスコフスキー兄弟を中心としたウィーン・フィルのメンバーにより1947年に結成された名アンサンブル。戦前の古き佳きウィーンを感じさせるロマンティックな芸風でモノラル時代より英デッカに数多くの名盤を残しました。ステレオLP時代に入るとリーダーを若きアントン・フィーツに交代し、ウィーンの伝統を受け継ぎつつも新時代に合わせた端正な演奏スタイルをとり、とくに1961年4月に録音されたディヴェルティメント第17番のLPは長く「決定盤」の名をほしいままにしました。

当セットではアントン・フィーツ時代に録音されたモーツァルト作品のステレオ録音全てと、ヴィリー・ボスコフスキー時代の貴重なモーツァルト・ステレオ録音を集成したものです。珍しい音源としてはボスコフスキー時代に録音されたディヴェルティメント第1番変ホ長調K.113。英デッカでは7インチ45回転盤でしか発売されなかったもので、今回が日本初CD化となります。また、CD4のディヴェルティメント第7番ニ長調K.205(167A)では、オリジナルLP通り前奏と後奏に行進曲K.290/167ABを初復活。往時の野外演奏と同様に、楽隊の入退場をCD盤上に演出、再現しました。

2014年2月 板倉重雄

ディヴェルティメント 第17番 二長調 K.334 (320b)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)は祝典や娯楽のための「機軸音楽」も数多く書いているが、イタリア語で「楽しみ、娯楽、気晴らし、レクリエーション」という意味の“Divertimento ディヴェルティメント”もその一つで、これらのほとんどは1780年にウィーンに出る前の作である。「セレナード」や「カッサシオン」も同じ種類の作品だが、このうちセレナードは戸外での演奏を目的に書かれた。そしてこれらは貴族や富豪からの依頼によって作曲されたため、楽章構成も楽器編成も、もちろん音楽の内容もヴァラエティに富んでいる。ザルツブルク時代における最後のセレナードが第9番ニ長調K.320《ポストホルン》であるのに対して、最後のディヴェルティメントは第17番で、モーツァルトのこのジャンルでの最高傑作となった。特に第3楽章の優雅な〈メヌエット〉は〈モーツァルトのメヌエット〉として広く愛されている。モーツァルトはウィーン時代に1曲だけディヴェルティメントを書いているが(変ホ長調K.563)、6楽章構成をとっているものの、楽器編成はヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの三重奏で、内容的には弦楽三重奏曲に近い作品になっている。

ディヴェルティメント第17番はザルツブル

クの裕福なローベニヒ家からの依頼によるもので、友人のシギスムント・ローベニヒが1780年7月にザルツブルク大学を卒業することを祝って催されたパーティのために作曲されたと考えられている。その時期は「マンハイム=パリ旅行」からザルツブルクに帰ってきて半年ほどたった1779年8月である。モーツァルトはこの旅行に出るため休暇願いを提出したが、受理されず、結局宮廷音楽家を辞職して旅立ち、帰郷後ただちにコロレド大司教に宮廷オルガニストとして復職を願い出ることになる。これは受け入れられ、これから1780年11月までの1年10ヵ月、モーツァルトはふたたび「長期にわたって」ザルツブルクに留まることになる。この期間モーツァルトの心中は決して穏やかではなかったが、《戴冠式ミサ》K.317、《ポストホルン・セレナード》K.320、ディヴェルティメント 二長調K.334、ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲変ホ長調K.364をはじめとするすぐれた作品を書いている。

先ほども触れた第3楽章の〈メヌエット〉に代表されるように、この作品にはフランスのギャラント・スタイルによる洗練された優雅な雰囲気満ちあふれている。これはこの時期の他の作品にも言えることで、マンハイムとパリでの体験が大いに生かされた結果と

言えよう。作品は6楽章からできており、楽器編成は2本のホルンと弦楽5部。行進曲ニ長調K.445はこのディヴェルティメントのために書かれたと推定されている。

第1楽章：アレグロ 二長調、4分の4拍子、ソナタ形式。

第2楽章：主題と変奏(アンダンテ) 二短調、4分の2拍子、変奏曲。

第3楽章：メヌエット 二長調、4分の3拍子。

第4楽章：アダージョ イ長調、2分の2拍子、ソナタ形式。

第5楽章：メヌエット 二長調、4分の3拍子。

第6楽章：ロンド(アレグロ) 二長調、8分の6拍子。

ディヴェルティメント《ザルツブルク・シンフォニー》
第1番 二長調 K.136

2回目のイタリア旅行からザルツブルクに帰ってきて間もない1772年の1月から3月にかけて、モーツァルトは弦楽4部による3楽章から成る作品を3曲、ニ長調K.136、変ホ長調K.137、ヘ長調K.138を作曲した。現在これらの作品は一般に「ディヴェルティメント」と呼ばれているが、作曲家自身はこのタイトルを付けていない。管楽器が加わっていない

楽器編成、また普通4から10というのに較べて少ない楽章数の点では、18世紀の典型的なディヴェルティメントとは言えない。しかし、当時は音楽の形式の名称はかなり自由であったようで、3曲とも3楽章から成る「シンフォニア」の形をとっており、K.136とK.138は急—緩—急というイタリア序曲風作品で、これらは「ザルツブルク・シンフォニー」と呼ばれることもある。現在では弦楽四重奏、弦楽五重奏、弦楽合奏などさまざまな形で演奏されている。イタリアでの音楽体験が十二分に生かされた、輝きに満ちた作品で、とりわけK.136二長調はこの頃のモーツァルトの作品の中で傑作の一つに数えられている。

第1楽章：アレグロ 二長調、4分の4拍子、ソナタ形式。

第2楽章：アンダンテ ト長調、4分の3拍子。

第3楽章：プレスト 二長調、4分の2拍子。

ピアノと管楽のための五重奏曲 変ホ長調 K.452

モーツァルトのピアノ、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットという珍しい楽器編成による五重奏曲は1784年3月30日に書き上げられ、2日後の4月1日にウィーンのブルク劇場での自身の予約演奏会で、ピアノ協奏曲の第15番変ロ長調K.450と第16番二長

調K.451とともに初演された。もちろんモーツァルトがピアノを弾いた。モーツァルトは父親への手紙の中で、この五重奏曲が大成功を取めたこと、そしてこの作品がこれまでの自分の最高のものと書いている。

1781年5月、ウィーンにおいて新たな音楽活動を開始したモーツァルトは、ピアノ教師として予約演奏会を催し、大きな人気を博して順調に滑り出した。しかし1787年あたりから驕りが始め、ピアノの弟子の数は目に見えて減り始め、予約演奏会にも客は思うように集まらず、経済的に苦しい状況に追いまれてゆくことになる。ピアノと四つの管楽器が、精妙なアンサンブルのうちにそれぞれの個性を十二分に発揮し、コンチェルト風な華やかさをもつこの優雅な作品は、「ウィーン時代」の前半の幸福なモーツァルトの顔を私たちに思い浮かべてくれるようである。

第1楽章はラルゴのゆったりとした魅力的な序奏に続いて、ピアノが第1主題を奏してアレグロ・モデラート ソナタ形式による主部に入る。第2楽章は三つの主題が登場するソナタ形式で書かれている。静かな趣をたたえた楽章である。ロンド形式で書かれた明るく軽やかな第3楽章には、全員がそれぞれソロリストであるかのように活躍するカデンツァが置かれている。

第1楽章：ラルゴ（序奏）—アレグロ・モデラート（主部）。

第2楽章：ラルゲット。

第3楽章：ロンド（アレグレット）。

ディヴェルティメント 第15番 変ロ長調 K.287

1773年3月、モーツァルトは三度目のイタリア旅行からザルツブルクに帰ってきた。この旅行でも望む職に就くことはできず、6歳の時に始まった旅また旅の生活はここでいったんピリオドが打たれた。これから1777年9月、「マンハイム＝パリ旅行」に出発するまでのほぼ4年半を、ウィーンとミュンヘンに短期間出かけてはいるが、モーツァルトはザルツブルクの宮廷音楽家としてこの地で過ごした。この間作曲に精を出し、およそ120曲の作品がその筆から生み出されている。これらの作品の中では第22番から第30番までの9曲の交響曲、《ザルツブルク協奏曲》と呼ばれる5曲のヴァイオリン協奏曲、そしてセレナーデやディヴェルティメントなどの「機会音楽」も数多く作曲されている。

1776年と1777年にモーツァルトは、ザルツブルクの司教とヒエロニムス・フォン・コロレド伯爵の妹で、ロードロン伯爵夫人アントーニアから依頼を受けて、その命名祝日のパーティのために2曲のディヴェルティメン

トを作曲した。1776年版がヘ長調K.247、1777年版がこの変ロ長調K.287で、いずれも傑作の誉れ高い作品である。この頃すでに大司教コロレド伯爵との関係はかなり深刻なものであったが、そのような事情をまったく感じさせない明るく、優雅な作品となっている。6楽章からできており、楽器編成は2本のホルンと弦楽4部である。

第1楽章：アレグロ 変ロ長調、4分の3拍子、ソナタ形式。

第2楽章：主題と変奏（アンダンテ・グラツィオーソ） へ長調、4分の2拍子。

第3楽章：メヌエット 変ホ長調、4分の3拍子。

第4楽章：アダージョ 変ホ長調、4分の4拍子、ソナタ形式。

第5楽章：メヌエット 変ロ長調、4分の3拍子。

第6楽章：アンダンテ 変ホ長調、4分の4拍子（序奏）—アレグロ・モルト 変ロ長調、8分の3拍子、ロンド形式。

長谷川勝英

M.ハイドン：ディヴェルティメント ト長調

ミヒャエル・ハイドン（1737—1806）はヨーゼフ・ハイドンの5歳年下の弟で、1745年に家を出て、ウィーンの聖シュテファン大聖

堂の少年聖歌隊員になった。そこで彼は声楽、鍵盤楽器、ヴァイオリンなどを学んだ。特に3オクターヴにも及ぶ並外れて澄んだ美しい声のボーイ・ソプラノであったことからソロイストにも選ばれ、ウィーンで演奏する機会に多く恵まれ、広く音楽界を見聞した。しかし変声期を迎えたハイドンは、直後に聖歌隊を去り、その後数年はウィーンで不安定な生活を送ったようである。そうした窮乏のち、彼は1757年にハンガリーのグロスヴァルダインの司教のもとで楽長に任命され、やがて1763年にはザルツブルクの大司教ジギスムント・シュラッテンバッハに仕える宮廷音楽家ならびにコンサートマスターに任命された。ちなみに彼がザルツブルクで重要な地位に就いていた時期は、モーツァルトが音楽家としての道を歩み始めた時期に一致している。1768年には宮廷オルガニストの娘で大司教の楽団の歌手だったマリア・マグダレーナ・リップと結婚しており、1771年にジギスムント大司教が死去したのちも宮廷音楽家として活動した。1777年にはトリニティ教会のオルガニストの地位も得、さらに1781年にはザルツブルクを去ったモーツァルトのあとを受けて宮廷および礼拝堂の楽長兼オルガニストとなった。その後、彼は終生ザルツブルクにあって活躍した。1801-1802年にはフランス軍のザ

ルツブルク占領から逃れるためにウィーンとアイゼンシュタットを訪れた際には、兄ヨーゼフと会う機会を得た。その時、ニコラウス・エステルハージ2世から彼の楽団の副楽長の地位を申し出られたが、すでに60歳を越えていたハイドンは、慣れ親しんだ環境から離れて生活することを望まず、ザルツブルクで兄よりも約3年早く世を去った。

ミヒャエル・ハイドンは、兄ヨーゼフと同様に多様なジャンルに多くの作品を残している。特に目立つのは教会音楽の作曲家として、生前から高い評価を受けており、ヨーゼフも彼を優れた教会音楽作曲家として認めていたし、ウィーンやマドリッドなどの宮廷からもこのジャンルの作品を依頼されている。その一方で、彼は生涯にわたって数多くの世俗的な器楽作品も作曲しており、40曲を越えるといわれる交響曲を初めとして、様々な楽器のための協奏曲、30曲ほどのディヴェルティメント、数曲ずつのバルティータやカッサシオン、ノットゥルノ、セレナータなどのほか、室内楽作品も少なくない。その中には弦楽五重奏曲も7曲含まれている。ただしそれらのうちの4曲は、ディヴェルティメントと呼ぶほうがふさわしいと思える楽章構成をとっている。いずれにしてもこれら五重奏曲は、モーツァルトのそれと同じように弦楽四重奏

にもう1本ヴィオラを加えた構成で書かれており、特に1773年以降の作品では、二つのヴァイオリンと二つのヴィオラのそれぞれを独立したグループとして対照的に扱っている点が注目される。

上述したようにミヒャエル・ハイドンは多くのディヴェルティメントを作曲しているが、初期の作品はほとんど二つのヴァイオリンとコントラバスという編成で書かれ、やがて様々な編成の作品へと移行する。ここに収められたト長調のディヴェルティメントは1785年6月に作曲されたもので、フルート、ホルン、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ（またはファゴット）という編成用に使われたものである。

福本 健

ディヴェルティメント 第1番 変ホ長調 K.113

編成：クラリネット2、ホルン2、弦4部（ザルツブルク用の改訂版はオーボエ、イングリッシュ・ホルン、ファゴット、ホルン各2、弦4部）。

1771年の11月にミラノで作られたと推定される作品で、のちに（1775年頃までに）モーツァルト自身の手によって、上記のように編曲し直された。クラリネットという楽器がザルツブルクにはなかったからである。

1769年から1771年の春まで、イタリアを旅行したモーツァルトは、その年の10月にミラノで上演する歌劇《アルバのアスカーニョ》の作曲を頼まれていた。この曲はその上演のためにミラノを再訪した15歳のモーツァルトによって書かれたことになる。

この原稿の表紙にはモーツァルト自身の手で“コンチェルトまたはディヴェルティメント”と書かれている。ここでもジャンルの考え方の融通性が目につく。モーツァルトがこれをコンチェルトというふう呼んだのは、今日のソロ・コンチェルトやバロックふうのコンチェルト・グロッソの意味ではない。各パートがそれぞれの持味をソリストのようにフルに発揮する音楽、といった程度の意味である。またディヴェルティメントと呼んだのは、オーケストラ用の室内の曲といったような意味に過ぎず、これは集会のミュージックとしてではなく、むしろ“観賞用”に作られ、演奏されたものである。

当時のザルツブルクになくてミラノにあった新式の楽器“クラリネット”が珍しくて、モーツァルトは喜びをこめてこの曲を書いている。モーツァルトはそののち、生涯にわたってこの楽器を愛したが、これがクラリネットを使った最初の作品である。ザルツブルクに帰郷後、上記のように彼はこれを同地のオ

ークストラ用に改編したが、この編曲は無駄に音が重なっただけで、クラリネット2本の美しさを作ることはできなかった。

石井 宏

ディヴェルティメント 第10番 へ長調 K.247

第1楽章：アレグロ へ長調、4分の4拍子、ソナタ形式。

第2楽章：アンダンテ・グラツィオーソ へ長調、4分の3拍子。

第3楽章：メヌエット へ長調、4分の3拍子。

第4楽章：アダージョ 変ロ長調、2分の2拍子、ソナタ形式。

第5楽章：メヌエット へ長調、4分の3拍子。

第6楽章：アンダンテ へ長調、2分の2拍子（序奏）—アレグロ・アッサイ へ長調、2分の2拍子、ロンド形式。

※解説はディヴェルティメント第15番を参照して下さい。

クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581

18世紀初めに登場したクラリネットは半世紀ほど経ってその存在を主張し始めるようになる。モーツァルトが初めてこの楽器をその作品に用いたのは17歳の時、ディヴェルティメント変ホ長調K.113で、その後シンフォニ

ーやオペラなどにも起用している。

1780年、ウィーンでの生活を始めたモーツァルトは、アントン・シュタートラー（1753-1812）というクラリネットの名手と出会って親交を結び、以後、クラリネットをオーケストラに用いたり、ソロ楽器とした作品を書く契機となった。モーツァルトのクラリネットのための作品と言えば、いずれもこのシュタートラーのために1789年9月29日に書き上げたこの五重奏曲と、同じ頃書き始められたものの完成はほぼ2年後、亡くなる1ヵ月ほど前になった協奏曲（イ長調K.622）で、それぞれのジャンルの最大の傑作として、光を放ち続けている。どことなく愁いを含んだ、実に表情豊かなクラリネットという楽器の持ち味、魅力が最大限に生かされた、協奏曲風な気品に満ちた作品である。晩年は経済的に苦しい状況にあったモーツァルトを、シュタートラーは何かと力になったという。そのお礼の意味もこめられているのだろうか。

第1楽章：アレグロ イ長調、4分の4拍子、ソナタ形式。

第2楽章：ラルゲット 二長調、4分の3拍子、3部形式。

第3楽章：メヌエット—トリオ I—トリオ II イ長調、4分の3拍子。

第4楽章：アレグレット・コン・ヴァリア

ツィオーニ イ長調、2分の2拍子。

クラリネット三重奏曲 変ホ長調 K.498

《ケーゲルシュタット・トリオ》

モーツァルトはピアノの入った三重奏曲を7曲書いている。このうち6曲がピアノ、ヴァイオリン、チェロという編成によっているが、このK.498だけはクラリネット、ヴィオラ、ピアノというたいへん珍しい楽器の組み合わせによって書かれている。1785年10月から翌年の11月にかけてモーツァルトは5曲のピアノ入りの室内楽曲を作曲したが、その1曲がこの作品で、1786年8月5日にウィーンで書かれた。1786年というとブルク劇場でオペラ《フィガロの結婚》を初演し、大成功を収めた年（5月）である。4手のためのピアノ・ソナタ へ長調K.497とともに、ピアノの弟子であったジャカン家の娘フランツィスカのための作曲で、シュタートラーのクラリネット、モーツァルトのヴィオラ、フランツィスカのピアノで初めて演奏されたものと思われる。作品は3楽章から出来ているが、アレグロでなく、アンダンテで開始され、メヌエット、ロンドーと続く。ジャカンの家でボウリングに似た遊びである“ケーゲルシュタット”をしながら書いたというエピソードから《ケーゲルシュタット・トリオ》とも呼ば

れる。

第1楽章：アンダンテ 変ホ長調、8分の6拍子。

第2楽章：メヌエット 変ロ長調、4分の3拍子。

第3楽章：ロンドー（アレグレット） 変ホ長調、4分の4拍子。

行進曲 二長調 K.290/167AB

ディヴェルティメントやセレナードなどの祝宴のための音楽にはお客の会場への入場、退場のための「行進曲」が作曲された。この行進曲二長調K.290は調性、楽器編成が同じことから、ディヴェルティメント第7番変ロ長調K.205のために書かれた行進曲と考えられている。

ディヴェルティメント 第7番 二長調 K.205 (167A)

1773年3月に3回目のイタリア旅行からザルツブルクに帰ってきたモーツァルトは、7月中旬から9月下旬にかけてウィーンで就職活動を行った。ホルン2、ヴァイオリン1、ヴィオラ1、ファゴット1（この録音ではなし）、低弦という、第2ヴァイオリンをもたない楽器編成によるこのディヴェルティメント第7番は、ちょうどこの頃、ザルツブルクがウィーンで作曲された。作曲目的は詳しく

は判っておらず、この年の8月18日に開かれたウィーン^のの医者フランツ・アントン・メスマー邸での庭園演奏会のため（メスマーは12歳のモーツァルトにオペラ《バステアンとバステイエンヌ》の作曲を依頼した人物）、あるいはザルツブルクの貴族アントレッター家の祝宴のためなどと推定されている。

第1楽章：ラルゴ 二長調、4分の4拍子（序奏）—アレグロ 二長調、4分の4拍子、ソナタ形式。

第2楽章：メヌエット 二長調、4分の3拍子。

第3楽章：アダージョ イ長調、4分の4拍子。

第4楽章：メヌエット 二長調、4分の3拍子。

第5楽章：フィナーレ（プレスト） 二長調、4分の2拍子。

カッサシオン 変口長調 K.99/63A

「カッサシオン」とはディヴェルティメントやセレナードと同じように祝宴などのための「機会音楽」である。作曲された時期とその目的ははっきり判ってはいないが、1769年（この年の12月に初めてのイタリア旅行に出かけた）の8月に行われたザルツブルク大学の卒業祝宴のための音楽、「フィナル・ム

ジーク」として書かれたのではないかと考えられている。

オーボエ2、ホルン2、ヴァイオリン2、ヴィオラ1、低弦という楽器編成で、〈行進曲〉に始まり、二つのメヌエットを含む七つの楽章から構成されており、最後に〈行進曲〉が再び演奏されて終わる形をとっている。最初のメヌエット（第4楽章）の美しさやヴァイオリンが活躍する第5楽章など、13歳の少年モーツァルトの純真な表情が浮かび上がってくるようだ。

第1楽章：マルチア 変口長調、4分の2拍子。

第2楽章：アレグロ・モルト 変口長調、4分の4拍子。

第3楽章：アンダンテ 変ホ長調、4分の4拍子。

第4楽章：メヌエット 変口長調、4分の3拍子。

第5楽章：アンダンテ ト短調、4分の4拍子。

第6楽章：メヌエット 変口長調、4分の3拍子。

第7楽章：アレグロ—アンダンテ 変口長調、4分の2拍子。

第8楽章：マルチア 変口長調、4分の2拍子。

ウィーン八重奏団について

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の主力メンバーが1947年にルツェルン音楽祭に出演したのをきっかけに、ヴァイオリンのヴィリー・ボスコフスキー、クラリネットのアルフレート・ボスコフスキーらが核となって創立された。作品によってウィーン・フィルの他のメンバーが参加し、モーツァルトを中心とした室内楽のさまざまなジャンルの作品を

演奏し、レコーディングした。第1ヴァイオリンがヴィリー・ボスコフスキーからアントン・フィーツに変わったあとしばらくして、1964年に初めて来日した。1973年にも来日したが、その後ほどなくして活動を停止した。そして1980年に新ウィーン八重奏団が誕生した。

長谷川勝英

※既発売CDのブックレットから転載しました。